



BICの前に、パリの修道院

トラックが目的地に着くやいなや、エウジェニオは私に降りるよう促した。

3日後、まったく同じこの場所で落ち合い、帰りの旅に出る。彼はそう念を押した。

携帯を取り出し、その夜泊まる場所を検索した。距離は3.6キロ。

そこで歩きはじめた。私をここまで連れてきた事実や出来事、奇妙な巡り合わせの連なりに思いをめぐらせ、ときおりこみ上げる笑みを隠しきれないまま、相部屋の宿に着くのを待ちながら。

ようやく着いてみると、建物は一風変わっていた。教会と製粉所と農業倉庫を混ぜ合わせたような代物だ。

だが、ここはフランスだ。イタリア人には奇怪に見えるものが、この国ではしばしばごく当たり前とされている。少なくとも、私はそう信じていた。

インターホンを押した。ブザーの代わりに聞こえてきたのは鐘の音。教会で聖体拝領が執り行われるときに鳴らす、あの鐘だった。

背の低い男が現れた。禿げ頭。黒いひげ。修道服姿。

予約済みで、支払いもオンラインで済ませてあると説明した。男は私の身分証を受け取って内容を確認、3番ロッカーの鍵を手渡し、Wi-Fiのパスワードを書いた紙をくれると、相部屋のほうへ案内してくれた。

歩きながら、何の用でパリに来たのかと訊かれた。私は答えた。「女です」

口にしたとたん、何かが自分の理解をすり抜けていく気がした。だが、何が？

男は私の前を歩きつづけた。ほどなく大きな扉を開け、中へどうぞと促した。

入ってみると、そこは倉庫のような場所で、二段ベッドが60台、バスルームはたったの2つ。女は右。男は左。

1984年、イタリアで兵役についていたときでさえ、これに少しでも似たものは経験しなかった。私が見たいちばん大きな兵舎でも、寝起きしていたのは20人だった。

ところがここでは、2000年前の同僚が、またしても私にメッセージを送る気にいるらしかった。「フレーガ、おまえはまだ何も見ちゃいない」

気がつけば、あらゆる国、あらゆる伝統の人間が集まる市場のただなかにいた。相部屋ではない。ホテルでもない。まったく別の何かだった。

イタリアなら、こんな場所は世間の憤激を買い、司法の捜査を招き、ニュースを独占していただろう。ここでは？　ごく普通。フランスへようこそ。

とはいえ施設そのものはカトリックのものであり、どうしてこんなものが存在しうるのか、私は知りたくなった。

やがてわかったのは、ここにあるカトリック修道会の率いる信徒団体のもので、その修道会の枢機卿はかつて、定められた型に自分を合わせることを拒んだためにヴァチカンから破門されていた、ということだった。

だから彼は、自前のシステムをつくったのだ。

携帯をWi-Fiにつなぐと、Chanelからメッセージが届いた。無事に着いたか、どのホテルに泊まっているのかと尋ね、住所を教えてくれれば翌朝の約束には自分が迎えに行く、と知らせてきた。

ついさっき着いたばかりだ、と返信した。旅はすこぶる順調だった。ホテルのほうは、親切にも運転手付きの車を用意してくれたので、明朝の足はもうある。それでも、申し出には礼を言った。

その晩、相部屋の大広間で、思いがけないことが起きた。インド系の一団とブラジルから来た一団が、同じ時に同じ音楽を聴いていたのだ。

聴けば聴くほど、耳になじみがある。やがて理由がわかった。彼らはgillettenarrative.comを開いていたのだ。

2000年前の同僚が私に見せたかったのは、これだった。そして私は嬉しくなった。

翌朝、例の3キロを歩いてから、地下鉄でシャンゼリゼへ向かい、予定よりずいぶん早く着いた。

入口の前で足を止めた。一瞬、自分は正しいことをしているのだろうかと思った。

答えはイエスだった。誰にも金を求めてはいないのだから。そして私は自由に、世界に耳を傾けることができた。

フェルディナンド